

令和5年度
園評価

兵庫教育大学 鈴木正敏先生

R5年7月28日

●総合評価

園庭が変化し、植物や生き物が増え自然を遊びに取り入れやすくなっている。遊びのコーナーが区切られたことでそれぞれに落ち着いて遊びに集中できるようになっており、近くの川や園の周りの環境も活かした保育を展開している。2、3歳から経験を積み重ね、遊びを通じて身体をつくることを意識していくことでより高いレベルでの教育実践が行われることを期待する。

●特に評価の高い点、園の良さ等

保育室と園庭の間に、図鑑等資料を使って子どもたちが好きな時に興味をもった植物や生き物について調べることができる研究所があり、中と外をうまくつなげることができていた。また集まりでは、クラスの一部の子が行った活動の様子をプロジェクターで写真を投影しクラス全体で振り返り、気づきの共有を毎日積み重ねていくことで子どもも保育者も一緒になって継続して活動を楽しむことができていた。

●課題・改善を求められる点

戸外での活動時間を分割したため、以前より他のクラスとの交流の機会が減ってしまっているところが見受けられた。各クラスでの取り組みを開放的に展開していくとよい。

2、3歳がより色々な刺激を受け、経験を積み重ねることができるよう以上児の活動などに参加する際は、見る楽しさを味わえるよう保育士が目線を操作することを意識していただきたい。

●第三者評価結果に対する法人・施設のコメント

園庭の変化に伴い子どもの遊びの様子にも変化が表れ、以前より自然とのかかわりが増え、五感を使った遊びに熱中する姿が見られる。一方で、一度に全員が戸外に出て遊ぶのが難しくなり遊び方に工夫が必要になっているため、活動の内容や場所、安全面の配慮等職員間での話し合いを深めていきたい。担当するクラスをどうしていきたいかというイメージを保育者がしっかり定めておき、そこから他クラスとの交流などを行っていき、子どもの育ちにどうつながるか、デメリットの補完も考えながら子どもたちのために質の高い教育をめざして精進したい。全体的に保育・教育活動は“子ども主体”に計画・実践されている。今後0～2歳児～3歳以上児への段差をなくした流れる保育へと保育活動の共有を目指していきたい。